

巻頭言 「弟子の舌」

宇野 元

「ぼくらのからだには、ビートルズの詩が刻まれているよ。」地下鉄の座席で、登場人物がそう語る、ある映画の一コマ。彼らの音楽が流れると、もう自然にからだは反応するという感じがよく表現されていると思います。若い時にふれた音楽には、そういう力がありますね。

駆け出しの頃。教会の会議の帰りに、駅ビルのレコード店に寄り道すると、ビートルズの棚の前で、議場で挨拶した宣教師とばったり。おや、と、顔を見合わせました。昨年の初夏の思い出。青い海と空を見ながら、夕日の中で友人が「ブラックバード」を歌ってくれました。「黒い鳥よ、傷んだ翼で飛び立て。そして飛行する術を身につけるんだ。」

互いへの複雑な思い。よい時の思い出と、こじれる現在。歩み寄る努力のすれ違い。明瞭な個性の違い。優れた四つの才能の開花による素晴らしい調和と、堪え難い不協和。私たちのからだの一部になる歌が、解散前の困難な時期にいくつも生み出されたのは、不思議な、信じがたいことに思われます。それらの歌は、困難で複雑な状況にある心に、しみこむように語りかけてきます。「今は、そっとしておこう。レット・イット・ビー。きっと答えが与えられる。」

聖書は、イエス・キリストについてこのように紹介します。「彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯芯を消さない」(マタイ 12, 20)。イエス自ら、私たちをこう招いておられます。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(同上 11, 28)。思えば、一人の人間には到底負いきれない重荷を背負い、癒えない傷を負う体験がありました。力尽きて、深い谷に孤独に横たわる体験がありました。疲れ、傷つき、重荷を負う者への招きが、十字架の苦難を通して与えられています。

また聖書は、弟子についてこのように記します。「主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え、疲れた人を励ますように、言葉と呼び覚ましてくださる」(イザヤ書 50, 4)。動揺しやすく、不安や悲しみにとらえられやすい者が、他者を励ます言葉を賜ると。

信じがたいことに思われます。不思議な配慮のもとで、イエス・キリストの招きに応える者とされ、みもとに集まる私たちが、疲れた人々のあいだで、自らも困難の中にあって、弟子の舌を与えられる！